

これからのグローバル化を考える

アメリカ合衆国ワシントン州のシアトル市は「ネイバーフッド（近隣住区）都市」の先進的な地域として知られています。シアトル市では移民の流入や新興都市の拡大などを背景に、多様なネイバーフッドが存在しており、そのネイバーフッド単位で市民がまちづくりに参加するシステムが構築されています。日本においても、少子高齢化や人口減少が進む中、住民参加型のまちづくりの推進は喫緊の課題だといえるでしょう。

今回は、令和7年度の海外研修「多様な主体を活かす地域経営～全米の最も住みたい街から学ぶ～」においてご講義いただきました埼玉大学人文社会科学部教授内田奈芳美様より、シアトル市におけるネイバーフッド・マッチング・ファンドと呼ばれるシステムをご紹介します。今後、日本が学ぶべき考え方についてご寄稿いただきます。

ワシントン州シアトル市におけるネイバーフッド政策から日本の都市が学べること：ネイバーフッド・マッチング・ファンドを通じた市民参加

埼玉大学人文社会科学部 教授
内田 奈芳美



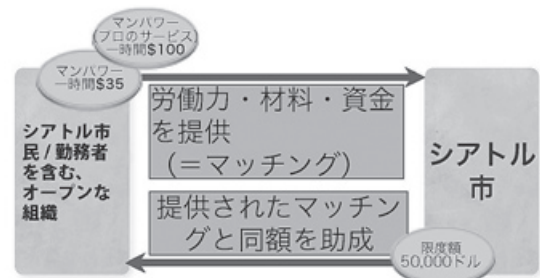
1 シアトル市のネイバーフッド政策とネイバーフッド・マッチング・ファンド

アメリカ合衆国の西海岸に位置し、スターバックスやアマゾンなどグローバル企業が立地することで知られるワシントン州シアトル市（人口約75万人）は、多様な地域を内包することから「ネイバーフッド（近隣住区）都市」と呼ばれ、ネイバーフッド政策の先進的都市と認識されてきた。筆者はワシントン大学の修士課程への留学以来同市のまちづくりについて研究を行ってきたことから、ここではシアトル市のネイバーフッド施策から日本の都市を考える上でのヒントを得ることとする。

ネイバーフッドとは、一般に近隣住区と訳されることが多いが、地理的な地域の範囲を示すだけでなく、アメリカでは人種や民族の集住するところや、地形などによって自然と形成されるものなど、その境界線には多様なあり方が存在する。移民の歴史や西海岸での新興都市としての拡大の経緯からシアトル市には多様なネイバーフッドが存在し、ネイバーフッド単位での市民参加がこれまで行われてきた（内田,2025）。そこではネイバーフッド単位でまちづくりに対する市民参加のシステムが構築され、ボトムアップの意思決定経験が積み重ねられてきた。そのシステムの中でも、特にシアトル特有の熱心な市民の活動を象徴するのがネイバーフッド・マッチング・ファンド（以下マッチングファンドと略す）と言われるものである。これは市民が労力等を提供しその労力に見合った金額と同額をマッチングという形で助成金として出すもの

であり、市民の活動を促進しながら、実際のまちづくりを進めていくものである（図1）。

図1 マッチングファンドの仕組み



（シアトル市資料から作成）

筆者は以前からマッチングファンドについて研究しており、まちづくりに空間的な改善という点から寄与してきただけでなく、マッチングという、みんなで労力などを提供するという結束力を必要とする仕組みから生まれるコミュニティ構築上の役割についても着目してきた。シアトル市ではピーク時より全体の予算規模は縮小したが、まちづくりへの市民関与の関わりしるをつくる上で有効な手段として、マッチングファンドは1989年から現在まで続けられてきた。

すでに日本の自治体でもいくつかマッチングファンドのシステムは取り入れられているが、シアトル市での実践は長期間にわたり、規模も大きい。そこで本稿では、このシアトルのマッチングファンドのこれまでを振り返り、そこから日本が学ぶべき事は何かを考える。

2 マッチングファンドのこれまで

図2はマッチングファンドのこれまでの助成規模を示したものである。本データはシア

3 マッチングファンドでどのようなことが行われてきたか

こういったプログラムの断続的な変化によってマッチングファンドの利用形態が多様化し、様々な参加の機会のレベルを提供することにつながってきた。例えば植樹するための苗木の現物を市から提供し、それらを「植える」ことで労力を提供する事例や、「アウトリーチ（手を差し伸べる）」に特化したプログラムではメンバーシップを拡大させることを主目的としたプロジェクトにも助成が行われてきた（内田・佐藤, 2005）。こうしたことで、ストリート単位で植栽イベントに参加したり、「アウトリーチ」目的のバーベキューイベントに参加したり、というように、資金を提供する・労力を提供する・1日だけ参加する、など過度に負担が重くないかたちで地域に貢献することも可能としてきた。

前述したマッチングファンドのプロジェクト・データベースだけで3,800件以上のプロジェクトが記録されているが、実際どのようなプロジェクトが行われてきたのか、一帯の敷地を対象とした事例を具体的に見てみよう。ここでは長年にわたって多方面からマッチングファンドを活用してきたユニバーシティ・ハイツの事例について、2005年当時の筆者の研究論文を参照しながら近年の活動も確認してみる（内田・佐藤, 2005）。ユニバーシティ・ハイツはもともとは1902年に小学校として建設され、1989年に生徒数の減少から廃校になったところをコミュニティの拠点にした事例である（写真1）。廃校の反対運動を行っていた団体がそのまま運営団体（ユニバーシティ・ハイツ・センター（資料や時期によって呼称が異なる）

）となった^{*5}。この拠点がどのようにマッチングファンドを活用していたかの一覧が表1である。ユニバーシティ・ハイツに関しては大規模な歴史的建造物の再生であり、もちろんマッチングファンドだけで

トル市のオープンデータ^{*1}に依り、データ上2013～2015年はプロジェクトが無いように見えるが、実際には当該年度に複数のプロジェクトに助成されているとの記録がある^{*2}。そのため、この3年間のデータ不在については少し外において考える必要がある。徐々に拡大してきたマッチングファンドであったが、金額のピークは2002～2003年だった。シアトル市の人口は近年急激に増加しており、そういった意味では拡大する方向性が続いてもおかしくなかったのだが、2017年を除けば全体の予算規模はピーク後減少傾向にある。背景にはシステム自体の変化があり、2001年に市長の交代とともにマッチングファンドの生みの親ともいえるジム・ディアース氏が退任したこと、2011年にはネイバーフッドごとに提供してきたサービスの縮小、そして2016年にはネイバーフッド・ベースの参加システムが一度解体されることになったという点が挙げられる（内田, 2025）。これらは、1989年からマッチングファンドが続けられてきた中で、多様性を増したシアトル市の変化に対応するためのプロセスであったとも言えよう。また、マッチングファンド自体も助成プログラムを変化させながら続いており、例えば植栽を進める「アーバン・フォレストリー（都市緑地）」ファンドプログラムは前述のデータベース上では1996年のみに記録されていたり、また、地域ベースのプロジェクトに助成していた「大型プロジェクトファンド」は、2017年には地理的な範囲を超えたテーマ型のプロジェクトにも助成するため、再編して「コミュニティ・パートナーシップ・ファンド」^{*3}となるなど、その時々コミュニティの変容に合わせてプログラムが設定されてきた。

図2 マッチングファンドの規模^{*1}





写真1 2018年のユニバーシティ・ハイツ。マッチングファンドのプロジェクトで外壁が塗り替えられ、入り口を改良し、広場が整備された(筆者撮影)。



写真2 ユニバーシティ・ハイツでは「P-Patch」と呼ばれるコミュニティ・ガーデンの整備にも複数回マッチングファンドが用いられた(2018,筆者撮影)。

は資金は十分ではなく、様々な資金源の組み合わせの一つとしてファンドが活用されてきた。しかし、多いときには4万ドルを超えるような大規模な「マッチング」は、多様なボランティアや支援によって準備されてきたものであり、コミュニティの拠点として機能してきたことが読み取れる。また、コミュニティ・ガーデン友の会 (Friends of P-Patch) という組織はユニバーシティ・ハイツの敷地を用いてコミュニティ・ガーデンを運営してきた(写真2)。この「P-Patch」とは、シアトル各地で行われているコミュニティ・ガーデンの名称であり、マッチングファンドを用いた整備も多く、シアトルのコミュニティ力の象徴でもあ

る。このプロジェクトにもみられるように、それぞれの関心や目的に合わせた規模でのマッチングファンドの活用が一帯の敷地で多様に繰り広げられ、時間を掛けて改良を行いながら市民力でコミュニティ拠点が維持されてきたことが分かる。

4 シアトルから学べること：より強固なコミュニティのために必要なこととは

ユニバーシティ・ハイツの事例からも分かるように、シアトルではマッチングファンドが地域に浸透し、助成規模やプログラムは変化しながらも、多様な規模感でコミュニティ

表1 ユニバーシティ・ハイツ関連で助成されてきたマッチングファンド

助成年	プロジェクト名	マッチング (米ドル)	助成 (米ドル)	申請主体	内容
1991	建物バリアフリー化	48,968ドル	42,645ドル	University Heights Center for the Community Association (以下UHCCAと略)	リフトの設置
1991	建物改良計画策定	4,860ドル	4,150ドル	UHCCA	
1993	バリアフリートイレ・休憩室整備事業	3,290ドル	2,700ドル	UHCCA	
1995	コミュニティ・ガーデンの拡大	7,360ドル	4,996ドル	その他	ガーデンの拡張
1999	物理的資産キャンペーン	106,038ドル	100,000ドル	UHCCA	屋根、雨樋、外壁などの改修工事
2002	コミュニティ・ガーデンの拡大	15,310ドル	10,000ドル	P-Patch (コミュニティガーデン)友の会	ガーデンと屋外コミュニティ集会スペースの設計・建設
2002	コミュニティ・マーケットの開始準備	5,775ドル	5,775ドル	UHCCA	マーケット開催のための宣伝費、会場整備費
2004	コミュニティ・ガーデンの改良	4,505ドル	1,911ドル	P-Patch (コミュニティガーデン)トラスト	フェンス、歩道、コンポストなどガーデンの修復
2006	コミュニティ・アクションプラン策定費用	13,358ドル	15,000ドル	ユニバーシティハイツ友の会	オープンスペースなどのマネジメントを含む戦略計画策定
2007	ユニバーシティ・ハイツ再活性化	32,500ドル	59,438ドル	UHCCA	敷地全体の取得、再整備、持続可能性に関する計画策定
2012	コミュニティ・ガーデン、東側入り口の改善	406,310ドル	99,974ドル	University Heights (※名称が省略されているが、UHCCAを意味すると推測される)	外壁・排水設備の補修、ガーデンの再整備、入り口の景観改善
2018	緊急避難拠点の設置について	2,969ドル	2,635ドル	UHCCA	無料コンサートの開催と緊急避難拠点の周知機会設定
2019	エレベーター設置プロジェクトフェイズ1	14,600ドル	25,000ドル	UHCCA	エレベーター設置のための関連費用
2021	エレベーター設置プロジェクト支援	19,309ドル	38,000ドル	UHCCA	エレベーター設置のための関連費用

(データは*1のデータベースから引用、筆者訳)

の改善に寄与してきた。

これらの背景にあるコミュニティの力はどこから来ているのだろうか。プロジェクト開始20年後に行われたシアトル市による2009年のマッチングファンドに関するレポートで、シアトルにおいて何がコミュニティを強くするのか、フォーカス・グループ・インタビューが行われていた。ここにいくつかの答えが隠されているだろう。そこでは、「コラボレーションの機会」「フレンドリーな精神と多様性の許容」「強力な地域「らしさ」」がコミュニティを強くするものとして言及されていた。また、強いコミュニティをつくるための戦略要素の一つとして、「小さいけれども、目につきやすいコミュニティ構築のプロジェクト」が挙げられていた。これは、例えば店頭の塗装プロジェクトなど、外に開かれていて見えやすいものを意味しており、マッチングファンドは関わりのきっかけとしてのこういったプロジェクトを後押ししてきたことで、コミュニティの構築にもつながっていったのである。

このように、マッチングファンドはプロジェクトへの貢献や参加を通して、自分にあったレベルでコミュニティへの関与の手がかりを提供してきた。マッチングファンド自体は日本でも行われてきているが、前述のインタビュー結果にもあるように、シアトル市では特に、プロジェクトが申請団体内部にとどまらず、より外部に見えやすい形で参加を開いてきたこと、そして、長年目に見える形で地域改良に貢献してきたことで、コミュニティに浸透しているところに特徴があると考えられる。

このようなマッチングファンドのシステム自体を日本が取り入れるというのも大事だが、筆者はシアトル市から最も学ぶべきは「コミュニティ参加への無理のない貢献の演出」という点だと考える。特に都市部では、最初から100%のコミットメントを求められると二の足を踏む人も多く、例えば「小さいけれども目につきやすい」プロジェクトなどを通して無理のない参加の形態を可能とすることで、コミュニティの力が結果的に高まっていくような形を形成できれば、それがマッチングファンドという形態である必要は必ずしもない。これまでの伝統的なコミュニティのフレーム

ワークを壊すのが難しいことは理解しているが、町内会の加盟率の低下などを見ても、日本における「無理のない参加」を別の枠組みを準備しながら考える時期に来ているのではないだろうか。

- *1 https://data.seattle.gov/Community-and-Culture/City-of-Seattle-Neighborhood-Matching-Funds/pr2n-4pn6/about_data (2025年9月閲覧) 2013～2015年のデータ欠如について担当者に問い合わせを行ったが、原稿作成時点(2025年9月)では未回答である。
- *2 <https://council.seattle.gov/2013/08/13/committee-wrap-up-8-9-13-nmf-large-projects-fund-and-dpr-opportunity-fund-recommendations/> (2025年9月閲覧) など、助成に対する議決が通過した記録が残されているが、それらのプロジェクトはデータベースには含まれていない。
- *3 City of Seattle, Department of Neighborhood “Neighborhood Matching Fund 2017 Frequently Asked Questions” (2017) 参照
- *4 https://data.seattle.gov/Community-and-Culture/City-of-Seattle-Neighborhood-Matching-Funds/pr2n-4pn6/about_data (2025年9月閲覧)
- *5 <https://www.uheightscenter.org/history-and-preservation> (2025年9月閲覧) 参照
- *6 フォーカスグループのインタビュー内容については Seattle Department of Neighborhood (2009) 「An Evaluation of the Neighborhood Matching Fund 1999-2008」 pp.51-53参照、引用(筆者訳)

【参考文献】

内田奈芳美 (2025) 『ネイバーフッド都市シアトル: リベラルな市民と資本が変えた街』 学芸出版社
 内田奈芳美、佐藤滋 (2005) 『まちづくり支援ファンドが市民主導のまちづくりの推進に与えた効果の研究—シアトル市、ネイバーフッドマッチングファンドを事例として』 日本建築学会計画系論文集No.594, pp.101-108

著者略歴

内田 奈芳美 (うちだ・なおみ)

1974年福井県生まれ。2004年ワシントン大学(シアトル)アーバンデザイン&プランニング修士課程修了。2006年早稲田大学大学院博士課程修了。博士(工学)。金沢工業大学環境・建築学部講師などを経て、現職。アーバンデザインセンター大宮の副センター長。2021～22年、ワシントン大学・ラトガーズ大学客員研究員。主な著書に『ネイバーフッド都市シアトル: リベラルな市民と資本が変えた街』(2025年、学芸出版社)『金沢らしさとは何か』(2015年、北國新聞社、共同編集)、『都市はなぜ魂を失ったか—ジェイコブズ後のニューヨーク論』(2013年、講談社、翻訳)など。